

那木加甫

1. 事業実施の目的

博士論文を作成のためのデータ収集

2. 実施場所

ロシア連邦カルムイク共和国エリスタ市

3. 実施期日

平成 28 年 11 月 14 日（月曜日）から 平成 29 年 2 月 27 日（月曜日）

4. 成果報告

●事業の概要

オイラド・モンゴルはかつて中央ユーラシア全域を支配する大帝国を築いたが、その政権の崩壊により、彼らの子孫はロシアのイジリ河畔から大興安嶺までに分散することとなった。現在、この広い地域はロシア、モンゴル、中国といった国家に分割されている。それぞれの地域に暮らすオイラド・モンゴルはマイノリティーになり、マジョリティーのロシア人やハルハ・モンゴル、漢民族などに同化される傾向にある。本研究は、これらオイラド・モンゴルが地域を超えた独自のエスニック・アイデンティティをもつのか、ということである。それを解明するためには、オイラド・モンゴルに共通の宗教信仰、歴史意識、言語を丹念に調べる必要がある。本研究では、チベット仏教、歴史意識と言語について、同じオイラド・モンゴルに属するとされるロシアのカルムイクと中国新疆のホボクサイルのモンゴルとを比較する。特に、彼らの仏教信仰で最も重要な地位を占める転生活仏シャリワン・ゲゲンを柱として、このオイラド・モンゴルの 2 つのグループでエスニック・アイデンティティが再構築されていく過程に着目する。

今回の調査は上記の研究目的を達するため、カルムイク共和国の首都エリスタにある開祖金寺を拠点として実施してきた。開祖金寺は今日ヨーロッパにおける最大の仏教寺院であるといわれており、2005 年にカルムイク政府が主体となって建設した。この背景には、1980 年代中期にソ連が国内で施行したペレストロイカ政策による民族政策の緩和と 1991 年のソ連の解体による社会主義政権の終結があった。こうした影響をうけてソ連の政治的影響下に置かれてきた旧社会主義圏においては、民族の伝統的文化の復興を主とする各民族のアイデンティティ復興が高揚してゆく。こうした時代背景のもとで建設された開祖金寺は今日どのような宗教的、社会的活動を行なっているのか、ということに今回は焦点をあてた。

今回の調査を通して当寺院の建設費用の出所を含む建設過程、僧侶の教育システム、寺院の管理体制や主な収入源、仏像の構成や招来の概要、座の配置、供物・金銭の管理や分配、法要の日程と内容、巡礼者や協力者の概要を含む基本状況を把握することができた。そのう

えで、当寺院が主体的に創設した B 慈善団体（以下 B 団体と略す）の活動に関して考察を深めた。B 団体は 2016 年の春（2 月～4 月）に開祖金寺が主催したカルムイク語及び仏教の基礎に関するコースを契機に、当コースの参加者から 30 数人のボランティアを募集して創設された。当寺院副院長である S 僧が団長を務めた。当団体の目的は、開祖金寺の影響力を生かして資金を集め、カルムイク国内の高齢者、低収入の家庭、重病の子供を支援することである。資金に関しては、主にスペインやアメリカなど海外に滞在するカルムイク人、ロシアの大都市に在住するカルムイク人、現地における有力者からの援助をうけている。また、自ら海外の慈善団体との協力を取り込むことと仏具オークション取引の実施といった多様な募金活動をも行なっている。以上の方法によって、この一年間に約 200 万ルーブルの資金を集めた。

当団体の援助活動は募金活動と同時に進行している。そのなかで、22 人の重病の子供に計 100 万ルーブルの現金、72 人の低収入家庭の子供にひとりずつに 3 千ルーブルの商品券（合計 21.6 万ルーブル）、60 人の低収入の家庭にひとりずつに 7 百ルーブルの携帯電話（合計 4.2 万ルーブル）を支援した。ほかにも、老人ホーム、療養所、孤児院へ定期的な物質援助を行なっている。これらの援助活動には総資金の約 9 割が使用された。

B 団体のメンバーは上記のように S 僧とボランティアの 30 数人である。メンバーの多くは働いており、既婚女性のほうが多く、なかにはカルムイク人と結婚したロシア人女性やダギスタン人女性とカルムイク国立大学在学生在が含まれている。団体運営は S 僧の下でメンバーの中から選出された 4 人の実行委員が中心に行ない、彼女たちは家庭や仕事をもっているため実行委員の任期は一年間交代制である。また、実行委員が働いていることに配慮し、平日に Viber（Viber とは、スマートフォン及びパソコン向けのインターネット電話アプリケーションであり、ロシア国内でよく使用されている）や携帯電話を通して、週末と休日に開祖金寺の図書室や S 僧の家で日常的な業務を行なっている。S 僧は団長として団体全体を統合し、地方政府機関との情報交換、団体の方針の設計、募金活動の展開、団体の宣伝などを務めとしている。実行委員は団長の指示に従って、援助活動の企画、資金や資料の管理、会計や報告書の作成などの業務を担っている。他のメンバーは実行委員を協力して品物の運搬や整理、会場設置といった協力役を担う。

ほかには、月に 1 回メンバー全員が集まってカルムイク語及び仏教に関する勉強会が行われる。このとき、団長の S 僧はメンバー全員に対して我々の活動は「善」を積むことであると常に強調する。ここでいう「善」とは、仏教の基本的因果論を基にしており、因果論によれば人びとが以前に行なった善悪の行為が、それに対応した結果をもたらすとされる。当団体を創設した開祖金寺のほうからすれば、この行為は仏教原理に沿って信者に対して行なっている「善」であり、メンバー個々にとっても彼らのボランティア行為は「善」を積むことになっている。つまり、ここでいう「善」を積むことは、メンバー個々のボランティア行為に対する積極性を呼びかける一方、S 僧の講演会やメディア宣伝において一般に用いられており、海外やロシア国内のほかの地域に在住するカルムイク人の資金援助に対する積

極性にも機能しているのである。

S 僧を含む開祖金寺の僧侶の多くは、1959 年にダライ・ラマ 14 世がインドへ亡命した後、インドにおいて再建したチベット仏教大僧院において仏教の勉強をしている。また、カルムイクの転生活仏であるテロ・トルク・リンポチェもダライ・ラマ 14 世の側近であるため、開祖金寺の宗教的、社会的活動にダライ・ラマ 14 世からの影響が大きいといえる。他方、カルムイク全国の範囲でも、母語、ダンス、民謡、生活用品など伝統文化を復活しようという目的で創設された様々な団体が数多く存在し、極めて活発である。むしろ、こうした団体活動がソ連崩壊後のカルムイク社会における宗教文化の復興を支えていると考えてよい。

●本事業の実施によって得られた成果

本調査により、ロシアのカルムイクにおける宗教文化の復興過程が解明できると期待される。成果は、調査のデータをまとめて 2017 年の日本モンゴル学会春大会において口頭発表を行い、当学会の学会誌である『日本モンゴル学会紀要』に「カルムイクにおける宗教文化の復興—開祖金寺の事例を中心に」というテーマで論文を投稿する予定である。また、当論文はこれから執筆する博士課程学位論文において重要な構成部分になりうると推測される。

●本事業について

貴重な調査機会を頂きありがとうございます。